

基調講演 1

新しい人間の絆 東欧諸国の古典学（要旨）

久保 正彰

東京大学名誉教授

古代ギリシア、ローマの学、つまり西洋の古典学は、度重なる破壊、散佚、亡失によって断片化した「人間の言葉」を再構築する歩みを刻んできた。ヘレニズムのホメロス・テキストの校訂にはじまるこの試みは、幾世に亘る歴史の変動にも耐えて今日も世界の各地で続けられている。

このような再構築の方法を一つの普遍的科学方法論のレベルに至らしめた大きな要因は一五世紀中葉以来の活版印刷術の普及である。中世写本の調査、比較検討、伝承された文言の系統的整理、そして伝本の源となった祖本の推定と復元にまでいたる一連の手続き、さらにその検証、という形で成立したのが近世、現代の古典文献学である。これは印刷のための版下原稿作成のための「低次元の文法手続き」である。同時に、印刷術によって爆発的に増加した知識の「量」の中から、真正に近い「質」を生み出す力となる学問の誕生でもあった。

このような学問的方法は、古代ギリシア、ラテン学の再構築にのみ限られて有効であったわけではない。ルネッサンスという「質の目覚め」の時代と共に去ってしまったものでもない。これは言語の種類、文献の性質を問わず、文献伝承を証拠として過去の文化を厳密に再構築する試みにおいて、欠くことのできない基本的なアプローチである。日本に於いては、すでに一九四一年池田亀鑑先生の『古典の批判的處置に関する研究』がこの方法論を詳しく検討し、その限界点を示し、それをさらに越えていく新しい方法を展開している。またその結果復元された『土佐日記』の驚くべき精度は既に周知の通りである。

またルネッサンス以来、飛躍的に精度を高めてきた古典文献学は、今日東西欧州諸国の研究者の間で多くの国際的編纂事業を進めていく上での、共通の基本的

方法となっている。次にその中の二例を紹介したい。これらには、日本からも研究者の派遣と資金の援助という形で協力している。

(1) 『古代ラテン語集成』(Thesaurus Linguae Latinae)は、バイエルン学士院を中心として一九世紀末に始まる。この編纂事業はまさに古典ラテン語の再構築そのものであるが、今日もなお着実にその成果を逐年、辞典分冊の形で公刊し、昨年暮には第一五〇分冊を出している。このように大規模かつ長期に亘る「古典学の再構築」が事業として成り立つための必要条件を数えれば、(a)資料整理の為の「低次元文法」の確立、徹底化、(b)中興の祖、(c)事業維持、財源確保、研究者獲得の為の実務的情熱、(d)そして(c)を支えていく国際的編纂協力委員会であり、これらの組織基盤が充実していればこそ、この事業はバイエルン学士院を中核拠点として成り立ってきている。二度の大戦、東西分割、そして再統一という歴史の荒波に耐えてきた事業が、組織として蓄えてきた「再構築」の技術と知見であり、これは現在進行中の幾多の国際的研究プロジェクトにとって一つのモデル・ケースとなっている。

(2) 第一次大戦後(一九一九年)結成された国際学士院連合(Union Académique Internationale)が推進している五九種の研究事業はいずれも専門研究者に役立つ資料を厳密に校訂、編纂公刊することを目的とし、その過半は古代、中世の文献伝承研究と「低次元」に於いて深く関わっている。その一つ『中世哲学者総集』(Corpus Philosophorum Medii Aevi)は、アリストテレスと中世哲学諸流の系譜を文献学の方法によって明らかにすることを目的とし、ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語、アラビア語、シリア語の各言語による中世写本の網羅的調査、検証にもとづく批判的校訂本を着

実に刊行しつつある。これに協力参加する諸国学士院は十指にあまる。このような多言語文献に関わる国際的協同研究が可能となっているのは、一つにはその源流がアリストテレスであること、一つには中世という時代の特性に求められるが、しかし何よりもその文献学的方法論の均質性に負う所が大きく、共通の手続きを厳密に蹈み行うことによって、共同の「再構築」が進められてきたからであろう。

ところで右にあげた(1),(2)の例は、共に東欧諸国の古典学の実績に負う所が極めて大きい。『古代ラテン語集成』に関してはその始源をドイツ語圏内の五つの学士院の協力組織に負い、東西分割後もミュンヘン・ライブチヒの協力体制は堅持されてきた。また『中世哲学者総集』は、ポーランドのクラコフ学士院の企画、提案に沿って組織され、推進されてきた歴史をもつ。東欧諸国の自由化以来、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ロシアなどに於いては、国際的協力組織を編成して、「古典学の再構築」に取り組む動きが盛んになりつつある。現在クラコフ学士院の『ローマ帝国と蕃族ヨーロッパ諸民との交渉史研究』、ルーマニア学士院附属考古学研究所の『古代貨幣学集成』、ロシア学士院の『スキタイ・サルマ

タイ文化と古典世界』などの、大規模な国際的編纂事業が緒につこうとしている。

以上あげたものは一部に過ぎないが、そのいずれも各々の事業推進の中核拠点となる国にとっては、課題の文化史上の必然性が十分に首肯されるものであり、各々「古典学の再構築」は国際的社会における自国の伝承文化のアイデンティティを高めようとする試みでもある。また、いずれも大規模かつ長期にわたる事業であるが、その最終的完成作品の見取図が、出発点の当初より極めて明確に描き出されていることが、大きい特色であり、また事実、それなくしては「古典学の再構築」を唱えても協力体制を組むことは出来ないだろう。そして東西ヨーロッパ諸国の諸例を通じて看取できる最大の特色は、やはり共通の「低次元の批判学」が不動の基礎となっている点である。また諸々の「古典学の再構築」はその出版成果に於いてのみ評価が下されるのではなく、学問に必須の「低次元基礎学」の優秀な人材育成機構としての価値もまた、等しく問われていることを忘れてはなるまい。誠に粗略な話で千万恐縮であるが、他山の石として頂ければ幸甚である。

